

【特別活動報告】特別企画展「船場御坊の四百年」

青木 馨
安藤 弥
松金 直美

はじめに

一 特別企画展「船場御坊の四百年」展示リスト

二 ダイジェスト船場御坊の四百年

三 船場本徳寺略年表

四 船場本徳寺歴代・関係系図

むすびにかえて

はじめに

二〇一一年九月、姫路において特別企画展「船場御坊の四百年―新発見！本徳寺の歴史と名宝―」が開催された。この史料展示は同朋大学仏教文化研究所の協力により実現したものであり、この数年来、実施している船場御坊の所蔵史料に関する調査研究の関連事業である。史料調査自体は継続中のものであるので、本報告では、特別企画展に関する活動内容について、中間報告的に提示しておきたい。

船場御坊は正式名称を「真宗大谷派姫路船場別院本徳寺」という（兵庫県姫路市に所在）。本徳寺の歴史は戦国時代、本願寺連如とその弟子空善らの活動に始まり、空善らが播磨布教の拠点として建立した道場が後に英賀御坊本徳寺になったと考えられている。教団と地域の双方に大きな影響力を有した本徳寺であったが、豊臣秀吉によって英賀から亀山に移転、そして、本願寺の東西分派に関連して、船場本徳寺が分立することになる（船場本徳寺の歴史については後掲諸資料を参照のこと）。

江戸時代以降の船場本徳寺は、東本願寺歴代の血縁が入寺して住職を務める別格寺院であった。そのため、格式



船場本徳寺本堂全景

の高い特殊な法衣・荘厳が整えられ、武家・公家や文化人との交流などから、数々の調度品や美術品がもたらされている。また、享保年間の建立とみられる十七間四面に及ぶ大規模な本堂は、現存の真宗別院建築としてはかなり古く、文化財的価値は高い（山門・鐘楼・大玄関とともに姫路市の重要文化財に指定されているが、さらに県・国からの指定が望まれる）。しかし、近年は本堂を含む諸殿・境内すべて整備が必要な時期に来ており、また地域における文化的拠点としての性格・役割も、あらためて問われるべき段階にある。船場本徳寺の歴史的検証の必要性が高まってきているといえる。

今般、史料調査の終了を待たずに史料展示に取り組んだのは、調査した史料自体の魅力とともに、それを社会的に公開することが、全体的な歴史的検証の機運を高めることになると思われたからである。

特別企画展は九月六日（火）から十一日（日）までの六日間、イーグレ姫路（姫路市民ギャラリー）B1特別展示室で行われた（開室時間は九時半～十八時）。主催は、姫路船場別院本徳寺（船場御坊）と、船場御坊を中心とする地域の活性化を大きな課題とするNPO法人歴史と出会えるまちづくり船場城西の会である。御坊関係者の尽力に加えて、城西の会という地域において歴史に健やかな関心を持つ市民グループ関係者の尽力が、今回の企画展実現にあたって大きかったことを特記しておきたい。後援には、姫路市・姫路市教育委員会・（財）姫路市文化国際交流財団が名を連ね、地域における注目度も推察されよう。

また、前述のように同朋大学仏教文化研究所が協力し、青木馨（客員所員）、安藤弥（所員・幹事）・松金直美（客員研究員）の三名が一貫して携わったが、さらに、史料調査の段階から、兵庫県立博物館小栗栖健治館長補佐の協力・指導のもと、大谷大学の若手教員・院生有志との合同チームを形成して取り組み、今回の史料展示にあたっては協力し合ったことが大きな力となっている。この点も画期的なことと考える。

ところで、展示に際してはパネル解説ならびに、それに基づく図録（A4判全8頁）を作成した。担当は以下の通りである。

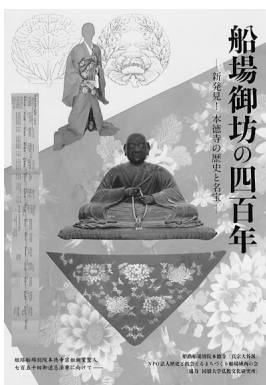
〔解説執筆〕 青木馨・安藤弥・松金直美

〔デザイン〕 川端正吾氏 川端絢氏

〔図録印刷〕 双光エシックス株式会社

〔パネル製作〕 タイコー展装株式会社

パネル・図録ともに好評を得たが、紙幅等の関係で、パネル内容のすべてを図録に収めることはできなかった。そこで、本報告では、次に展示リストを掲げた上で、図録に掲載できなかったパネル内容のうち、「ダイジェスト船場御坊の四百年」「本徳寺年表」「本徳寺系図」の三点を掲載し、今後の研究に資することにした。



図録表紙

一 特別企画展「船場御坊の四百年」展示リスト

第1部 本徳寺の歴史

〔本徳寺の由緒〕

- 1 本徳寺略譜 一冊
- 2 本徳寺譜 一冊
- 3 船場御坊古今集記 一冊
- 4 本徳寺沿革一覧図 一枚
- 5 船場御坊御再建等記録 一冊
- 6 貞照院殿帰参興起之事 一冊
- 7 徳川忠長書状 一通
- 8 京極高和書状 一通
- 9 播州姫路歴代城主 一冊
- 10 親鸞影像・同裏書 〔特別出陳〕 一冊
- 〔本徳寺の系譜〕
- 11 蓮如木像（本徳寺開基） 一躯
- 12 顕浄院釈教珍（寿継）影像 一幅
- 13 釈尼教妙影像 一幅
- 14 浄澤院釈宣純（從継）影像 一幅
- 15 貞照院釈尼良春影像 一幅
- 16 演慈院釈琢玄（瑛白）影像 一幅

- 17 間光院釈一玄(海澄) 影像 一幅
- 18 誓好院釈尼敬証影像 一幅
- 19 真香院釈達威禅尼影像 一幅
- 20 顕明院釈嚴継影像 一幅
- 〔本徳寺の記録・聖教・図面〕
- 21 琢如上人十三回忌御法事記 一冊
- 22 御堂日記 六二冊
- 23 亀麿様御誕生留 一冊
- 24 顕明院様御在京御日記 一冊
- 25 懇志礼状 一通
- 26 親鸞伝書上 一冊
- 27 御俗姓(勝珍謹写) 一卷
- 28 御末寺配下控 一冊
- 29 本徳寺建物之図 一枚
- 30 明治天皇行在所実測平面図 一枚

第2部 本徳寺の名宝

〔法衣・装束・打敷〕

- 31 色素絹 一領
- 32 五條袈裟 一領
- 33 七條袈裟・横被 一領一肩

- 34 袍裳 一領一腰
- 35 半尻 一着
- 36 打敷(萌黄地抱牡丹八藤) 一枚
- 37 打敷(紅縮緬菊花) 一枚
- 〔調度品〕
- 38 姫路革黒御紋附文箱 一点
- 39 姫路革朱色小物入 一点
- 40 姫路革唐獅子牡丹之図文箱 一点
- 41 鶴亀時絵香炉盤 一点
- 42 黒漆塗播州牡丹紋入蒔絵火鉢 一点
- 43 黒漆塗菊時絵煙草盆 一点
- 〔文化的絵画〕
- 44 朗眼詠歌 一幅
- 45 タンカ 一幅
- 46 日暮之図 一幅
- 47 黄菊之図 一幅
- 48 瀑布之図 一幅
- 49 楊柳観音之図 一幅
- 50 行在所襖 二枚

* 特別出陳のNo.10は養念寺(愛知県名古屋市・真宗大谷派)所蔵で、
あとはすべて真宗大谷派姫路船場別院本徳寺所蔵である。

二 ダイジェスト船場御坊の四百年

(1) 船場本徳寺の創立

船場御坊本徳寺の創立は元和四年（一六二八）のことです。本徳寺の歴史自体は戦国時代からありますが、江戸時代初期の本願寺の東西分派が新たな展開を生み出しました。

先の姫路藩主池田輝政の政策により、播磨国の本願寺門徒は亀山本徳寺を中心に西本願寺派に帰っていました。これに対して、東本願寺一三代宣如が、新たに姫路藩主となった本多忠政に播磨国の東本願寺派再興を願い出しました。そこで忠政が宣如に寺地（現在の船場の地）を寄進し、東本願寺派の本徳寺（船場御坊）が創立したのです。

最初の住職には本願寺の血縁に連なる顕浄院教珍が入寺し、宣如の姉教妙を内室（妻）として、「船場御坊」の基盤を築きました。慶安三年（一六五〇）には姫路藩主松平忠次からさらに土地（寺内町）寄進を受けています。



教妙影像

(2) 本堂再建

江戸時代の「船場御坊」は、姫路藩や本山東本願寺と密接な関係を持ちながら歴史的に展開していきます。そのなかで、八代住職聞光院一玄は船場本徳寺中興と称されます。

東本願寺一六代一如の息男であった一玄は本徳寺に入寺後、宝永七年（一七一〇）に姫路藩主榊原政邦から飾西郡井ノ口済岡の土地を寄進され、本徳寺歴代の廟所を移転安置します（現在の御山廟所）。

さらに一玄は、先代からの念願であった本堂再建に力を注ぎ、自ら勸進活動を行うなどして（この際に使用したという笠・杖・鉢が現存する）、享保三年（一七二八）本堂再建の落慶法要を行ったと伝えられます。この享保再建の本堂が現在まで存続し、貴重な歴史的建造物となっています。



一玄影像

(3) 近代のあゆみ

明治維新以降も、船場御坊（別院）本徳寺は、江戸時代以来の格式や文化を保ちながら歴史を刻み続けます。

明治六年（一八七三）境内に「勸開中学校」が姫路初の中学校として開校されました。明治十八年（一八八五）には明治天皇が船場本徳寺に逗留し、その際に使用した書院が行在所として現在に残ります。

大正五年（一九一六）境内に「船場御坊幼稚園」が開設され、これも現在に存続します。第一次世界大戦時には境内にドイツ人捕虜収容所が設けられ、ドイツ人捕虜が作成した「お城のモニュメント」がやはり現存します。

船場本徳寺はたびたび火災に遭いますが、昭和二十年（一九四五）の姫路大空襲の時でさえ、本堂は奇跡的に焼失を免れています。



お城のモニュメント

(4) 現在の「船場御坊」

現在の「船場御坊」は真宗大谷派（東本願寺）の別院として、播磨地域の真宗信仰の大切な拠点であり続けています。

「船場御坊」には、本堂をはじめ貴重な歴史的財産が残されていますが、歴史的に古いだけに痛みも激しく、修復等も必要な時期にきています。本堂は現在、姫路市文化財に指定されていますが、全国的に見れば、国指定文化財になってもよいものです。

創立以来、船場の地にあって、地域社会との関わりも深い「船場御坊」ですが、つながりを確かめ直す時期にきていました。そうしたなか、「NPO法人歴史と出会えるまちづくり船場城西の会」との御縁があり、同会の活気あふれる活動により、新しい方向性が見え出しています。

平成二十三年（二〇一一）「親鸞聖人七百五十回御遠忌法要」を機縁に、真宗大谷派山陽教区の御遠忌事業として「船場御坊」境内の再整備が始められることになりました。

「今、踏み出そう聞法・研修拠点の再建を」という呼びかけのもと、同朋会館の建設などが予定されています。

* 文体はパネル当時のままとした。



行在所曳き家工事

三 船場本徳寺略年表

承安三年 (1173)	親鸞誕生。	永正十二年 (1515)	三月一日、実玄没 (19)。これ以後、実玄弟実円、英賀本徳寺と三河土呂本宗寺を兼帯する。
弘長二年 (1262)	十一月二十八日、親鸞没 (90)。		この年、本徳寺の本堂建立という (一町半四方の境内に、南北七間・東西七間の本堂との記録がある)。この後、「寺内町」が形成されたという。本願寺の御坊寺院として西国方面の一大拠点となる。
文永九年 (1272)	親鸞墓所を改め、大谷廟堂建立。		十二月十八日、実円没 (58)。実円孫証専が跡を継ぐ (本宗寺兼帯)。
元亨元年 (1321)	このころ、大谷廟堂、「本願寺」となる。		本願寺証如息女 (後の顕妙尼)、証専に嫁す。
応永二十二年 (1415)	蓮如誕生。		十一月二十一日、証専、院家となる (前年、本願寺門跡成)。
明応元年 (1492)	本願寺前住蓮如、空善ら弟子五人を播磨国へ派遣。空善ら、英賀の浦に道場 (後の本徳寺) を建立し、布教活動を行う。	弘治元年 (1555)	
明応二年 (1493)	二月二十八日、蓮如、空善に方便法身尊像 (絵像本尊) を下付する (寺号「本徳寺」を称するという)。	永禄元年 (1558)	
		永禄三年 (1560)	
明応五年 (1496)	十一月十二日、本願寺実如、空善に「英賀東常住物」として親鸞影像を下付する。	永禄七年 (1564)	二月二十八日、三河一向一揆が徳川家康に敗北し、土呂本宗寺焼失。以降、証専の住坊は本徳寺のみとなる。
明応八年 (1499)	三月二十五日、蓮如没 (85)。	天正元年 (1572)	十月五日、証専没 (34)。この後、証専室が出家し (顕妙尼)、本徳寺において播磨教団を統括する。
永正元年 (1504)	十二月十一日、本願寺実如、本徳寺に親鸞絵伝を下付する (寺号の同時代史料上の確実な初見 (※補注))。	天正八年 (1580)	閏三月二十九日〜四月二十四日、豊臣秀吉
永正九年 (1512)	実玄 (本願寺実如息男)、英賀本徳寺に入寺する。		

天正十年（1582）

が本徳寺の西にあった英賀城を攻略する。
秀吉の姫路城下町整備にともない、本徳寺
が英賀から亀山に移転させられる。寺領三
百石をもらうという。

慶長七年（1602）

本願寺の東西分派にともない、亀山本徳寺
と播磨教団は、顕妙尼の意思により東本願
寺に帰属する。

九月二十二日、顕妙尼没（57 増進院）。

養子教円（奈良吉野願行寺勝了息男）が跡
を継ぐ。

慶長十四年（1609）

姫路藩主池田輝政と東本願寺教如（十二代・
別立初代）との間に事情が生じ、本徳寺と
その門末すべて、西本願寺に転派させられ
る。教円は准専と改名する（以降、西派亀
山本徳寺）。

元和三年（1617）

東本願寺宣如（十三代）、池田輝政没（1
613）による池田家没落後、姫路城主と
なった本多忠政に対して、播磨国における
東本願寺の再興を願う。

元和四年（1618）

姫路藩主本多忠政、池田組屋敷百間四方の
土地（船場の現在地）を寄進。七月二十七

元和六年（1620）

日、本堂建立落慶（十三間四方の本堂とい
う）。落慶法要のため東本願寺宣如、播磨
に下向する。教珍（本善寺顕珍息男）、宣
如の命により、船場本徳寺に入寺し、五代
住職となる。《船場本徳寺の創立》
東本願寺教如息女（宣如姉。後の教妙尼）、
教珍に嫁す。

寛永二年（1625）

三月二十二日、教妙尼没（30）。

慶安三年（1650）

姫路城主松平忠次が、土地（現在の「地内
町」）を寄進。

明暦二年（1657）

正月十二日、教珍没（？ 顕浄院）。教珍
息男宣純が継職（六代）。

寛文三年（1663）

二月十八日、宣純没（52 浄澤院）。六月
十七日、東本願寺十四代琢如の息男琢玄
（母教珍息女）が継職（七代）。

寛文八年（1668）

この年、「別院」と命名されるという。
良春尼（西本願寺十三代良如息女、亀山本
徳寺准円（西本願寺十二代准如息男）内室）、
准円没後、西本願寺との間に事情が起り、
亀山を退出。京都九条家（母方実家）に隠
遁した後、船場本徳寺に迎えられる（琢玄

と義理の母子関係を結ぶ。

天和二年 (1682)

琢玄、越前福井本瑞寺を兼任。

貞享四年 (1687)

四月七日、東本願寺十六代一如の息男一玄が本徳寺に入寺。琢玄息女と結婚。

元禄十年 (1697)

琢玄、本徳寺を出て本瑞寺に転住。一玄、継職(八代)。後に一玄、越中城端善徳寺を兼任。

元禄十四年 (1701)

四月十八日、良春尼没(78 貞照院)。

宝永六年 (1709)

五月九日、琢玄、越前にて没(62 演慈院)。

宝永七年 (1710)

姫路藩主榊原政邦、飾西郡井ノ口濟岡(現在の御山)に四五〇〇坪の土地を寄進。一玄、本徳寺歴代の廟所を移転安置する。

《御山廟所の創設》

正徳二年 (1712)

姫路藩主榊原政邦、土地(南地)を寄進。

享保三年 (1718)

五月、本堂再建の落慶法要。十七間四面の大伽藍(現在の本堂)が完成する(琢玄の時代から本堂再建の志願があり、榊原政邦の支援もあって実現。一玄は再建勧進の活動を行い、その際に使用したという鉢、笠、杖が残る)。《現本堂の完成》

享保八年 (1723)

一玄、隠居。息男真純、継職(九代)。

享保十三年 (1728)

正月十三日、一玄没(52 聞光院)。

元文三年 (1738)

九月八日、真純没(33 欣浄院)。東本願寺十七代真如の命により、近江長浜大通寺

一応(一玄弟)が本徳寺を兼任(1740)。

寛保元年(1741)大通寺を辞し本徳寺

に入るも、翌年(1742)隠居し大通寺に帰る(歴代に数えず)。

寛保二年 (1742)

一玄息男真証(真純異母弟)、本徳寺を継職(十代)。

寛延二年 (1749)

本徳寺境内、水害に遭う。

寛延三年 (1750)

四月十八日、本徳寺、姫路藩主酒井忠恭より北地を借り受ける(明治四年(1871)十二月買い取り)。

宝暦四年 (1754)

本徳寺、新田開発を行う。

宝暦八年 (1758)

七月四日、真証没(35 恩重院)。東本願寺十八代従如の命により、長浜大通寺真応(二応息男)が本徳寺を兼任(1762)ただし入寺せず)。

宝暦九年 (1759)

真証内室敬証尼(二応息女)が本徳寺を継職(十一代)。

宝暦十三年 (1764)

東本願寺従如息男麟丸(後の応如)、本徳

寺入寺と決まる。

明和九年（1772）

鱗丸（光暁）、東本願寺新門に決まり（ただし安永五年（1776）没）、本徳寺には長浜大通寺真応息男乗証が入寺し、後に継職（十二代）。

安永四年（1775）

四月十四日、敬証尼没（？ 誓好院）。

天明元年（1781）

三月二十七日、乗証没（18 得遇院）。

天明四年（1784）

十一月四日、真高（一如曾孫）、美濃平尾願証寺（真徳寺）から本徳寺に転住し、継職（十三代）。

天明八年（1788）

五月二十日、真高没（53 常護院）。後に息男達照が継職（十四代）。この年（正月三十日）、本山東本願寺が焼失。

文政十一年（1828）

九月十七日、達照没（47 浄行院）。後に息男達相が継職（十五代）。

安政六年（1859）

九月二十日、達相没（43 超勝院）。内室達威尼（東本願寺二十代達如息女）、継職（十六代）。後に達相・達威尼の息男厳継が継職（十七代）。

明治四年（1871）

十二月、酒井家より借り受けていた北地を買い取る。

明治六年（1873）

本山東本願寺より、蓮如木像を下付される。教団の機構改革により御坊から「管刹」となる。

明治九年（1876）

本徳寺境内に「勸開中学校」が姫路初の中学校として開校。

明治十七年（1884）

「管刹」制度が廃止される（「御坊」に戻る）。教団の機構改革により「別院」となる（復称する）。

明治十八年（1885）

八月十八日、明治天皇の西国行幸に際して船場本徳寺に立ち寄り、安政年間に建設していた書院を宿所とする。《行在所》

明治二十一年（1888）

八月十二日、有栖川熾仁親王が船場本徳寺に逗留した際に、厳継の所望に応じて寺号「本徳寺」の額字を揮毫する（現在も本堂に掲額）。

明治三十七年（1904）

達威尼没（75 真香院）。

大正五年（1916）

本徳寺境内に私立船場幼稚園開設（現船場御坊幼稚園）。

大正七年（1918）

第一次世界大戦（1914～1918）中、本徳寺境内にドイツ人捕虜収容所が設けられ、ドイツ人捕虜が境内で「お城のモニュ

メント」を製作する。

大正十三年（1924）

四月九日、嚴繼没（71 顯明院）。彰顥が継職（十八代）。

昭和七年（1932）

十一月二日、御殿より失火。本徳寺本堂の焼失は免れるも、行在所は一部破損（蓮如木像が厨子を焼失し、昭和八年（1933）に新調する）。

昭和十二年（1937）

十一月五日、彰顥没（40 広開院）。闍真が継職（十九代）。

昭和十八年（1943）

十一月五日、御殿より失火。本徳寺本堂焼失は免れる。

昭和二十年（1945）

七月三日、姫路大空襲。本徳寺本堂は焼失を免れる。

昭和四十四年（1969）

四月二十五日～二十八日、「宗祖親鸞聖人七百回忌法要」を厳修する（本堂内陣等を修復する）。

平成十三年（2001）

四月二十一日～二十二日、真宗大谷派山陽教区と協賛で「蓮如上人五百回御遠忌法要」を厳修する。

平成十八年（2006）

三月二十四日、本徳寺の本堂・山門（袖堀・燈籠二基）・鐘楼・大玄関の四棟が姫路市

平成二十年（2008）

重要文化財に指定される。
四月五日～六日、「山陽教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌お待ち受け同朋大会」を厳修する。

平成二十三年（2011）

十二月二十八日、闍真（大谷暢心）没（78 広済院）。
親鸞聖人七百五十回忌の年に、真宗大谷派山陽教区御遠忌記念事業として、山陽教区同朋会館建設第一期工事、はじまる。

〔主要参考文献〕

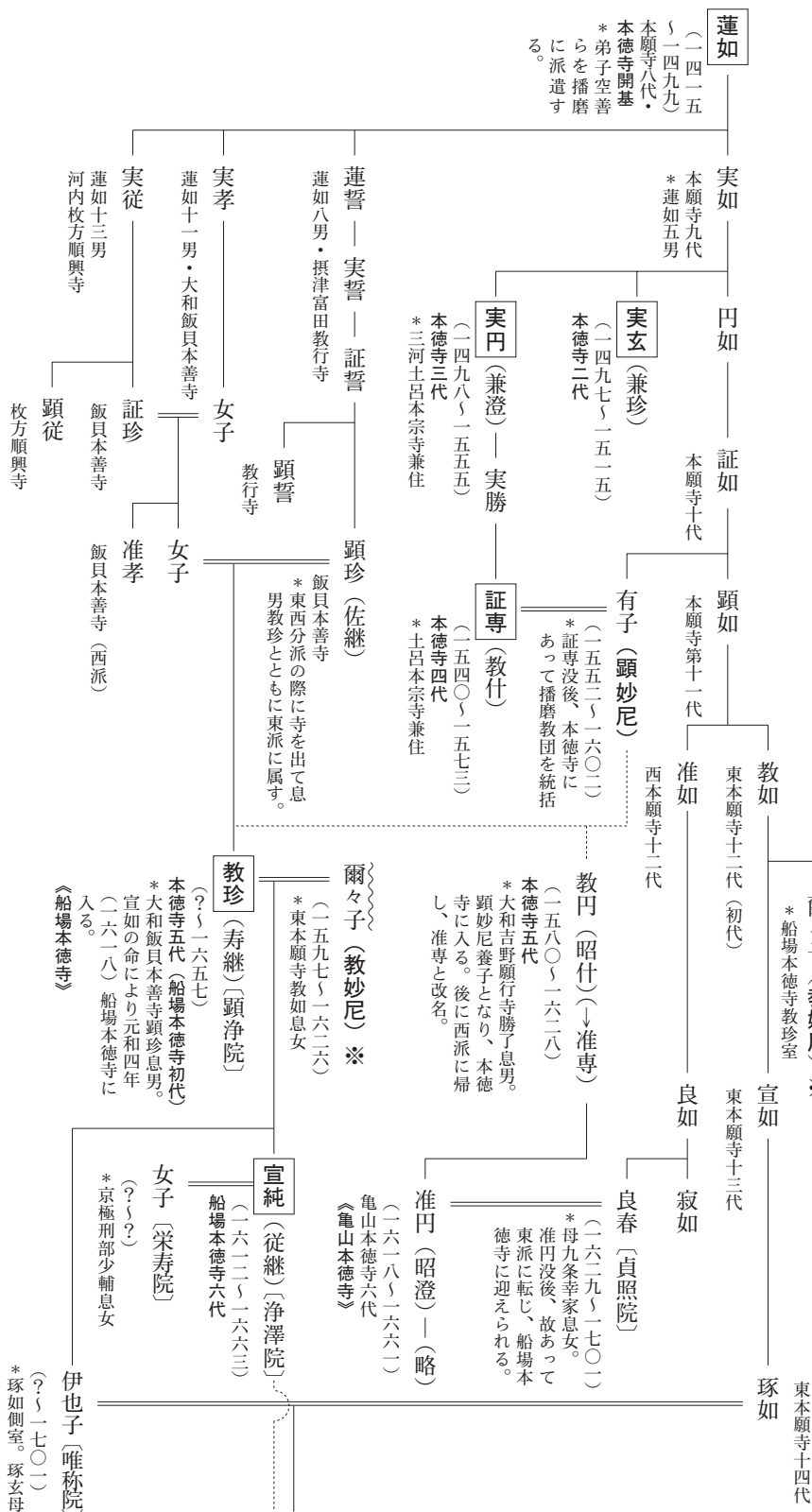
『本徳寺略譜』『本徳寺譜』『船場御坊古今集記』『本徳寺沿革一覧図』『船場御坊御再建等記録』『貞照院殿婦参興起之事』（以上、展示史料）
『船場本徳寺の沿革』『姫路船場別院本徳寺（パンフレット）』

* パネル当時の内容から若干修正した。今後増補・修正が必要である。

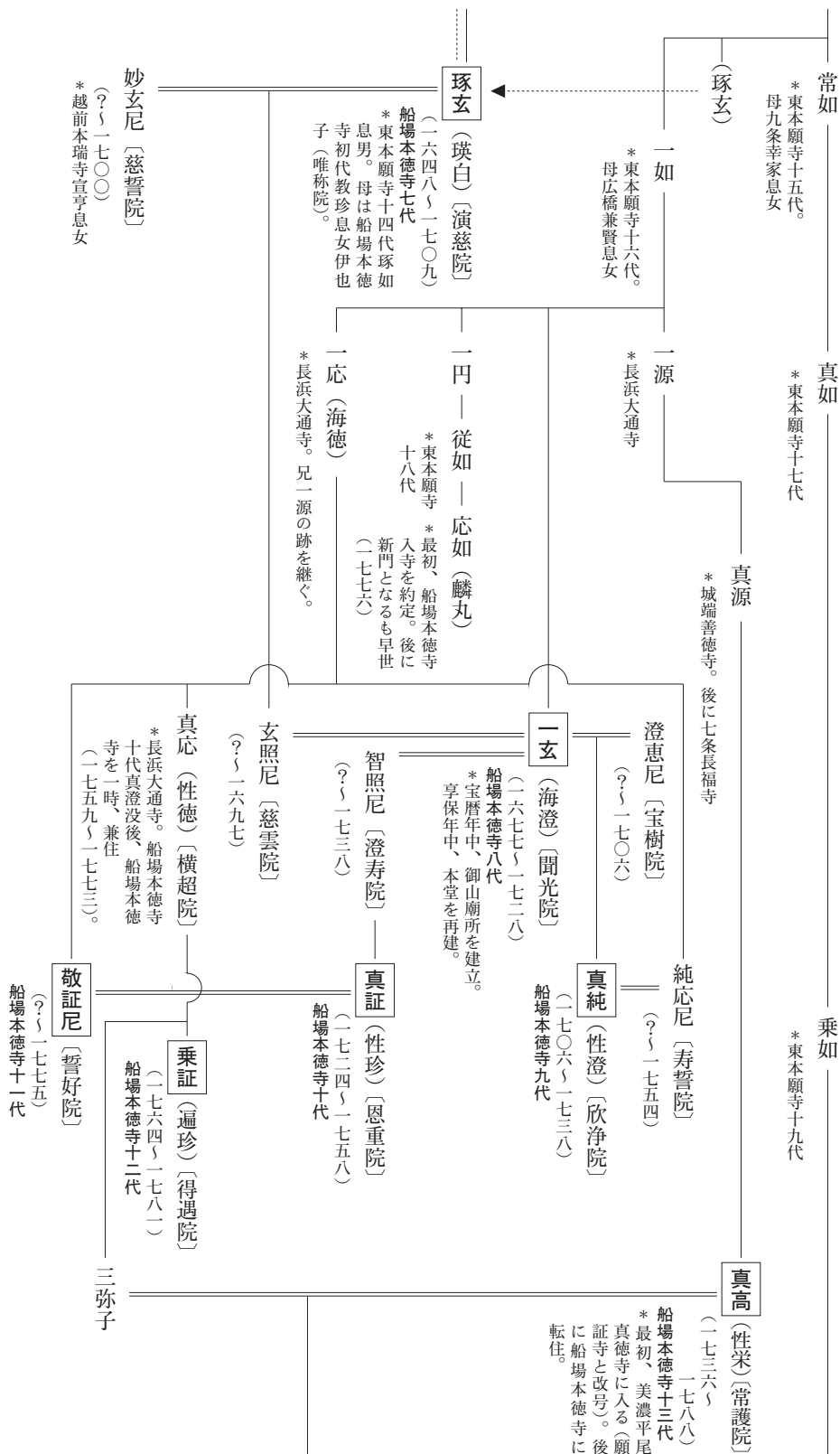
〔※補注〕その後の調査で、明応八年（1499）「英賀本徳寺門徒」と明記された実如裏書方便法身尊像の存在が確認された。寺号の初見がさらにさかのぼることになる。詳しくは後考をまちたい。

四 船場本徳寺歴代・関係系図

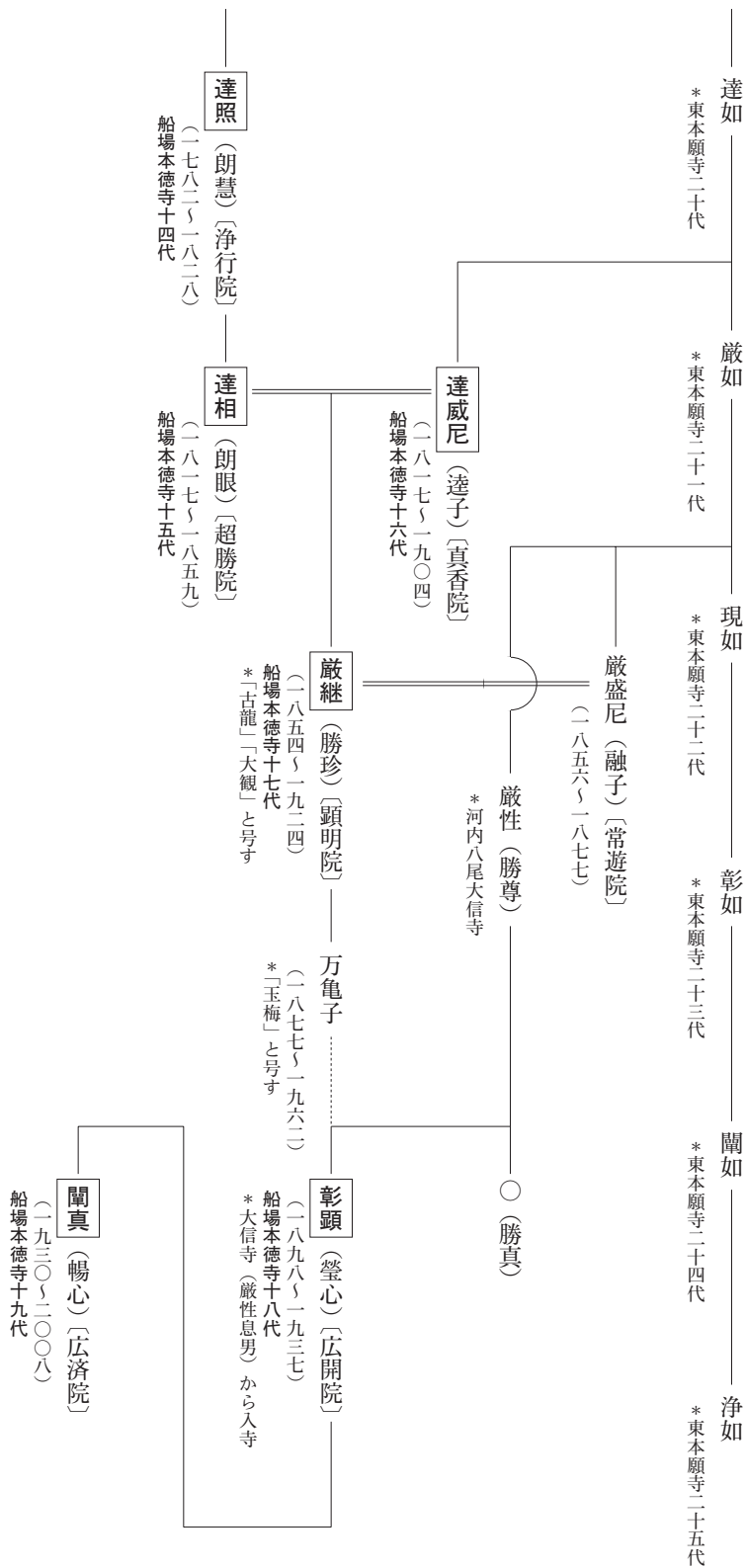
(その1 開基〜六代)



(その2 七代～十三代)



(その3 十四代〜十九代)



*展示パネル段階では一枚で示したが、今回の再掲にあたっては三頁に分割した。
また若干の修正をした。

むすびにかえて

六日間にわたる特別企画展の来場者数は延べ二一三三人を数え、多くの方が初公開の展示史料を興味深く観覧されていた。とりわけ、地元の方からの懐かしさを込めた感想が印象的であった。神戸新聞の取材もあり、九月七日（水）朝刊に記事として掲載された。その他、関連行事は以下の通りである。

・九月九日（金）十四時半～ あいめっせホール（イーグレ姫路3F）

特別講演「播磨と真宗」 草野顕之氏（大谷大学学長）

（主催 大谷大学同窓会播磨支部）

・九月十一日（日）十一時～ 特別展示室内

ギャラリートーク：小栗栖健治氏・中山栄一郎氏（NPO法人歴史と出会えるまちづくり船場城西の会）・青木馨・安藤弥の四名により、船場御坊や展示の内容について説明。

以上、船場御坊（本徳寺）の所蔵史料に関する調査研究の関連事業として、今年度実現した特別企画展の内容について、粗々述べてきた。この成果をふまえ、あらためて史料調査を進め、それに基づく研究成果を蓄積・公開していきたいと考える。また、研究のみならず、文化財保存や地域のまちづくりなどの方面にも貢献できれば幸いである。

最後になるが、この活動は、真宗大谷派山陽教区の御遠忌事業の一つとして位置付けられ、姫路船場別院本徳寺宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要に向けての取り組みの一環となっている。と同時に、真宗寺院史料調査に取り組む若手研究者・学生にとっては、たいへん貴重な経験の場である。調査研究をご許可いただき、あたたかなご支援をいただいている山陽教区、船場御坊の関係者各位に心より御礼申し上げたい。



ギャラリー展示の様子